

博士論文（要約）

論文題目 「共生」の都市社会学——理論的実践の構築に焦点をあてて——

氏名 三浦倫平

<目次>

序章：共生とは何か？	1
第1章：都市空間の危機的状況/都市社会学の危機的状況	27
1-1. 都市空間の危機的状況	27
1-1-1. 都市空間における「排除」	28
1-1-2. 都市空間の「均質化」	34
1-1-3. 都市空間の「荒廃化」	41
1-2. 都市社会学の危機的状況	43
1-2-1. 岐路に立つ都市社会学——テーマの拡散と理論的対象の後景化	43
1-2-2. 新都市社会学の問題提起とは何だったのか？——理論的実践の意義に着目して	48
1-3. 都市社会学における方法史的検討の必要性——なぜ、新都市社会学は隘路に直面したのか？	57
1-3-1. newest urban sociology の自己矛盾——「共生」という理論的対象の設定	57
第2章：都市社会学の方法史的検討——「共生」を切り口にして	69
2-1. 初期シカゴ学派と「意味世界」	70
2-2. 日本の都市社会学・地域社会学の方法史的検討	82
2-2-1. 開発研究と意味世界	82
2-2-2. 住民運動論と意味世界——『住民運動の論理』の意義と課題	85
2-3. 「意味世界」をいかに捉えるか——アクティヴ・インタビューの意義と課題	102
2-4. 「意味世界」の設定——「社会」と「空間」が重層的に絡み合う対象として	111
第3章：「迷宮の盛り場：下北沢」における紛争——「共生」に焦点をあてて	123
3-1. 下北沢地域と都市計画の概要——紛争の社会的背景	125
3-1-1. 下北沢地域の概要	125
3-1-2. 都市計画事業の概要	130
3-1-3. 反対運動の成立とその展開	135
3-2. どのような「共生」の構想が分立し、展開しているのか	141
3-2-1. 「公共性」をめぐる争いから「共生」の構想へ	141
第4章：「共生」の構想の社会的、空間的背景	172
4-1. 農村から盛り場への変容——下北沢前史	172
4-2. 「歩いて楽しめる空間」の背景——土地利用、表象、実践の相互作用に着目して	178
4-3. 計画推進側の意味世界の背景	194

4-3-1. 高層化という経済的合理性の追求の諸要因	194
4-3-2. 小田急線高架化問題という前史	197
第5章：共生を実現する為の構想の可能性と課題-----	226
5-1. 3つの政治的な構想	226
5-2. 対抗型の構想の前史	231
5-2-1. 裁判闘争で強化される対抗型の政治的構想	232
5-2-2. 裁判闘争という対抗的な政治的構想——小田急高架訴訟の意義と課題	234
5-3. 対抗型、連帯型、イベント型の構想/運動の誕生と展開——事業認可がおりるまでの First phase	240
5-3-1. 政治的構想の生成と混在	241
5-3-2. 対抗型の構想が含まれる諸実践の成果と課題	247
5-3-3. 連帯型の諸実践の成果と課題	258
5-3-4. イベント型の諸実践の成果と課題	261
5-3-5. 対抗型とイベント型の構想とその変化——First phase の総括	267
5-4. 対抗型と連帯型の運動の分岐と対立——保坂区長誕生までの Second phase	275
5-4-1. 裁判闘争という実践の意義	279
5-4-2. 跡地利用をめぐる対抗型の運動と連帯型の運動の対立	287
5-4-3. シンポジウムに表れる構想の分化	298
5-4-4. 連帯型の構想の台頭と対立型の構想との分裂——Second phase の総括	304
5-5. 「ラウンドテーブル」をめぐる構想の対立——保坂区長誕生という政治機会構造の変化が起きた Third phase	306
5-5-1. 保坂区長誕生からラウンドテーブル設置発言まで	306
5-5-2. 運動が直面したラウンドテーブル構想の課題	312
5-5-3. 各々の構想/運動の意義と課題——Third phase までの総括	330
第6章：結論——本論文の意義と課題——-----	338
6-1. 本論文の方法論的意義	338
6-2. 本論文の分析的意義	344
6-3. 本論文の課題と展望	351
【参考文献】-----	352
【資料】	366

【本文】

博士論文の全文はすでに出版されていて全文公表ができない。刊行された著作の書誌事項は以下となっている。

三浦倫平、『「共生」の都市社会学——下北沢再開発問題のなかで考える』、新曜社、2016年3月、ISBN:9784788514706

【参考文献】

- Abbott, A. 2011, *Department and discipline: Chicago sociology at one hundred*, Chicago: University of Chicago Press. (=2011, 松本康・任雪飛訳『社会学科と社会学——シカゴ社会学百年の真相』ハーベスト社.)
- 阿部泰隆, 2004, 「行政訴訟のあるべき制度、あるべき運用について」『法律文化』16(2): 28-33.
- Abu-Lughod, J. ed., 1994, *From Urban Village to East Village : The Battle for New York's Lower East Side*, Cambridge : Blackwell.
- 饗庭伸, 2006, 「都市をたたく時代のアーバンデザインの原理」『地域開発』501: 15-22.
- 赤川学, 2001, 「言説分析と構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房, 63-83.
- 秋元律朗, 2002, 『現代都市とエスニシティ シカゴ社会学をめぐって』早稲田大学出版部.
- Althusser, L.P. 1965, *Lire Le Capital*, Paris: Francois Maspero.(=1996, 今村仁司訳『資本論を読む<上><中><下>』筑摩書房.)
- Andersen, M.L. and Taylor, H.F, 2006, *Sociology : Understanding a diverse society updated*, Belmont, CA : Wadsworth/Thomson Learning.
- Arendt, H. 1951, *The Origins of Totalitarianism*, New York: Schocken Books. (=1972, 大島通義・大島かおり訳『全体主義の起源 2 帝国主義』みすず書房.)
- Arendt, H. 1958, *The Human Condition*, Chicago: University of Chicago Press. (=1994, 志水速雄訳『人間の条件』ちくま書房.)
- 東浩紀・北田暁大, 2007, 『東京から考える——格差・郊外・ナショナリズム』、NHK 出版.
- Castells, M. 1968, "Y a-t-il une sociologie urbaine?" *Sociologie du Travail*, 1: 72-90. (=1982, 山田操・吉原直樹・鯉坂学訳「都市社会学は存在するか」『都市社会学——新しい理論的展望——』恒星社厚生閣, 53-96.)
- Castells, M. 1969, "Théorie et ideologie en sociologie urbaine", *Sociologie et Sociétés*, 2: 171-191. (=1982, 山田操・吉原直樹・鯉坂学訳「都市社会学における理論とイデオロギー」『都市社会学——新しい理論的展望——』恒星社厚生閣, 97-136.)
- Castells, M. 1972, *La question Urbaine*. Paris: François Maspero. (=1984, 山田操訳『都市問題——科学的理論と分析』恒星社厚生閣.)

- Castells, M. 1983, *The City and the Grassroots: A Cross-Cultural Theory of Urban Social Movements*, Berkeley: University of California Press. (=1997, 石川淳志監訳『都市とグラスルーツ——都市社会運動の比較文化理論』法政大学出版局.)
- Castells, M. 1989, *The Informational City: Information Technology, Economic Restructuring and the Urban-Regional Process*. Oxford; Malden. (=1999, 大澤善信訳『都市・情報・グローバル経済』青木書店.)
- Castells, M. and J, Mollenkopf, 1991, *Dual City : Restructuring New York*, : Russell Sage Foundation.
- Castells, M. 2002, “Urban sociology in the twenty-first century”, *Cidades – Comunidades e Territórios*, 5: 9-19.
- Castells, M. 2008, “The New Public Sphere : Global Civil Society, Communication Networks, and Global Governance”, *The ANNALS of the American Academy of Political and social science*, 616(1): 78-93.
- Clifford, J. and Marcus, G, 1986, “Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography”, California: University of California Press.(=1996, 春日直樹ほか訳『文化を書く』紀伊國屋書店.)
- Cox, Kevin R, 2004, “Globalization and the politics of local and regional development : The question of convergence”, *Transactions of the Institute of British Geographers NS* 29:2 (2004), 179-194.
- Dawson, A. and B.H, Edwards, 2004. “Introduction: Global Cities of the South,” *Social Text*, 22(4):1-7.
- Elden, S. 2001, "Politics, Philosophy, Geography: Henri Lefebvre in Recent Anglo-American Scholarship", *Antipode*, 33(5):809-825.
- Espeland, W.N. 1998, *The Struggle for Water : Politics, Rationality, and Identity in the American Southwest*, Chicago : University of Chicago Press.
- Fraser, N. 1990, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy", *Social Text*, 25/26: 56-80. (=1999, 「公共圏の再考：既存の民主主義の批判のために」山本啓・新田滋訳『ハーバマスと公共圏』未来社, 117-159.)
- Foucault, M. 1976, *La Volonte de Savoir Volume 1 de Histoire ka sexualite Gallimard*. (=渡辺守章訳, 1986『性の歴史 I 知への意志』新曜社.)
- Freeman, L and F. Barconi, 2004, “Gentrification and Displacement New York City in the 1990s,” *Journal of the American Planning Association*, 70(1) : 39-52.
- Friedman, J. 1986, “The World city hypothesis”, *Development and Change*, 17: 69-83.
- 福武直, 1958, 『社会調査』岩波全書.
- 福武直編, 1965a, 『地域開発の構想と現実 1 ——百万都市建設の幻想と実態』東京大学出版会.

- 福武直編, 1965b, 『地域開発の構想と現実 3 ——工業都市化のバランスシート』 東京大学出版会.
- 藤井和佐, 2008, 「『超』 縮小地域の戦略と課題」『地域社会学会会報』 147: 4-8.
- 藤崎亮一・佐藤快信 2005, 「中心商業地域の地域づくり——諫早市の事例を通して——」『地域総研紀要』, 3(1): 57-64.
- Gans, H.J. 2009, “Some Problems of and Futures for Urban Sociology: Toward a Sociology of Settlements,” *City&Community*, 8(3): 211-219.
- Gamson, W. 1992, *Talking Politics*, Cambridge: Cambridge University of Press.
- 権安理, 2006, 「ハンナ・アーレントとポスト・ハーバーマスの公共論——社会学におけるアーレント公共空間論の受容をめぐる——」『ソシオサイエンス』 12: 30-45.
- Gregory, S. 1998, *Black Corona : Race and Politics in an Urban Community*, Princeton : Princeton University of Press.
- Gwen, v. E. 2010, “Exclusionary Policies are Not Just about the ‘Neoliberal City’: A Critique of Theories of Urban Revanchism and the Case of Rotterdam” , *International Journal of Urban and Regional Research*, 34(4): 820-834.
- Hagedorn, J. 1991, “Gangs, Neighborhoods and Public Policy”, *Social Problems*, 38(4) : 429-442.
- Hamnett, C. 1994. “Social Polarization in Global Cities: Theory and Evidence,” *Urban Studies*, 31(3) : 401-424.
- 韓東賢, 2006, 『チマチョゴリ制服の民族誌——その誕生と朝鮮学校の女性たち——』 双風社.
- 花田達郎, 1999, 『メディアと公共圏のポリティクス』 東京大学出版会.
- 花崎皋平, 1993a, 「共生の作法を求めて——理解の方法的抑制」『週刊読書人』 1987: 8
- 花崎皋平, 1993b, 『アイデンティティと共生の哲学』 筑摩書房.
- 花崎皋平, 1997, 「共生の思想」 木田元ほか編『コンサイス 20 世紀思想辞典』 第二版, 三省堂, 273-274.
- 花崎皋平, 2002, 『＜共生＞への触発——脱植民地・多文化・倫理をめぐる』 みすず書房.
- Harvey, D. 1989, “From managenalism to entrepreneunahsm : The transformation in urban governance in late capitalism,” *Geogrqfiska Annaler*, 71B(1) : 3-17. (=1997, 廣松 悟訳, 「都市管理者主義から都市企業家主義——後期資本主義における都市統治の変容——」『空間・社会・地理思想』 2: 36-53.)
- Harvey, D. 1993, “From space to place and back again: Reflections on the condition of postmodermtiy,” Bird, J. et al., *Mapping the futures : Local cultures, global changes*, London and New York: Routeldge, 3-29. (= 1997, 「空間から場所へ、そして再び——ポストモダニティの条件に関する省察——」 中島弘二訳, 『空間・社会・地理思想』 2: 79-97.)
- Harvey D. 2001, “Militant particularism and global ambition: the conceptual politics of

- place, space, and environment in the work of Raymond Williams”, D. Harvey ed, *Spaces of Capital: Towards a Critical Geography*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 158–187.
- Harvey, D. 2008, “The right to the city”, *New Left Review*, 53: 23-40.
- Hardt, M. and A. Negri, 2001, *Empire*, Harvard: Harvard University Press. (=2003, 水島一憲ほか訳『＜帝国＞ グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社.)
- 長谷川公一, 2003, 「環境社会学と都市社会学のあいだ」『日本都市社会学会年報』21: 23-38.
- 橋本博之, 2008, 「行政訴訟改革といわゆる『オープンスペース』論」『慶応法学』10: 1-30.
- Hebdige, D. 1979, *Subculture : The Meaning of Style*. London : Methuen. (=山口淑子訳『サブカルチャー』未来社.)
- 日高六郎, 1973, 「市民と市民運動」『岩波講座現代都市政策Ⅱ 市民参加』岩波書店, 39-60.
- 樋口直人, 2010, 「『多文化共生』再考——ポスト共生論に向けた試論」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』7: 3-10.
- 廣木良司, 2002, 「道路と鉄道と一体となった都市空間再生事業——東京都の連続立体交差事業と小田急裁判」『土木学会誌』87(4): 76-79.
- Holstein, J.A. and Gubrium J.F, 1995, *The active interview*, Sage: London. (=2004, 山田富秋他訳『アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房.)
- 堀川三郎, 1994, 「地域社会の再生としての町並み保存」社会運動論研究会『社会運動の現代的位相』成文堂, 95-143.
- 堀川三郎, 1998,, 「歴史的環境保存と地域再生」飯島伸子、船橋晴俊編『講座社会学 12 環境』東京大学出版会, 103-32.
- 堀川三郎, 2000, 「運河保存と観光開発：小樽における都市の思想」, 片桐新自編『シリーズ環境社会学 3 歴史的環境の社会学』新曜社, 107-129.
- 堀川三郎, 2010, 「場所と空間の社会学」『社会学評論』60(4): 517-534.
- 宝月誠, 1997, 「シカゴ学派の理論的支柱——モノグラフとミードの関係——」『シカゴ社会学の研究-初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣, 38-64.
- 飯島伸子, 1970, 「公害反対運動と公害裁判」『住民と自治』3: 44-51.
- 今村仁司, 1997, 『アルチュセール——認識論的切断（現代思想の冒険者たち）』, 講談社.
- 井上達夫, 1986, 『共生の作法——会話としての正義』創文社.
- 井上達夫・名和田是彦・桂木隆夫, 1992, 『共生への冒険』毎日新聞社.
- 井上達夫, 1993, 「共生の作法を求めて——なぜ共生を語るのか」『週刊読書人』1985: 8.
- Iveson, K. 2013, “Cities within the City: Do-It-Yourself-Urbanism and the Right to the City”, *International Journal of Urban and Regional Research*, 37(3): 941-956.
- 梶田孝道, 1986, 「住民運動・反差別解放運動 解説」似田貝香門・梶田孝道・福岡安則編『リーディングス日本の社会学 10 社会運動』東京大学出版会, 207-213.
- 鎌田大資, 1997, 「『社会改良』の『社会学』?——ハーベイ・W・ゾーバー『ゴールド・

- コーストとスラム-シカゴのニア・ノース・サイドの社会学的研究』——『シカゴ社会学の研究-初期モノグラフを読む』 恒星社厚生閣, 320-353.
- 金子賢三, 2005, 「街に生きる——下北沢計画の問題点と"Save the 下北沢"の活動」『現代思想』 33(5): 88-93.
- 片桐新自, 1995, 『社会運動の中範囲理論——資源動員論からの展開』 東京大学出版会.
- 片山善博, 2009, 「共生に関する一つの考察——承認論を軸に」 藤谷秀・大屋定晴・尾関周二 (編) 『共生と共同、連帯の未来—21 世紀に託された思想』 青木書店、36-63.
- 川本隆史, 1997, 「『共生』の事実と規範——<いのちのケア>に向かって」 栗原彬編 『共生の方へ (講座 差別の社会学)』 弘文堂, 33-54.
- 川本隆史, 2008, 『共生から』 岩波書店.
- 木村和穂, 2005, 「単なる道路問題ではない——下北沢の再開発を問う」『現代思想』 33(5) : 104-111.
- 木村和穂・志田歩・大熊ワタル, 2006, 「生きた街「下北沢(シモキタ)」を壊すな!——安全に名を借りた巨大再開発に対抗して」『インパクション』 152: 162-168.
- 鬼頭秀一, 1998, 「環境運動/環境理念研究における「よそ者」論の射程——諫早湾と奄美大島の「自然の権利」訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』 4: 44-59.
- 小林正美, 2006, 「代替案づくりに向けた専門家の取り組み」『まちづくり』 11: 66-69.
- きむらけん, 2007, 『下北沢 X 惜別物語』. 北沢川文化保存の会.
- 熊本博之, 2007, 「『縮小社会』における財の再配分」『地域社会学会会報』 144: 2-5.
- 栗原彬, 1997, 「共生ということ」 栗原彬編 『共生の方へ (講座 差別の社会学)』 弘文堂, 11-27.
- 黒川紀章, 1996, 『新 共生の思想——世界の新秩序』, 徳間書店.
- Kuymulu, M.B. 2013, "The vortex of Rights ; ' Right to the City' at a Crossroads", *International Journal of Urban and Regional Research*, 37(13): 923-40.
- Lefebvre, H. 1968, *Le Droit à la ville*, Paris: Economica. (=1969, 森本和夫訳 『都市への権利』 筑摩書房.)
- Lefebvre, H. 1970, *La Révolution urbaine*, Paris: Gallimard. (=1974, 今井成美訳 『都市革命』 昌文社.)
- Lefebvre, H. 1974, *La Production de l'espace*, Paris: Anthropos. (=2000, 斎藤日出治訳 『空間の生産』 青木書店.)
- Ley, D. 1996, *Gentrification and the Middle Classes*, Oxford : Oxford University Press.
- Logan J.R. and Molotch H.L. 1987, *Urban Fortunes : The Political Economy of Place*, Berkeley: University of California Press.
- Lojikine J. 1977, *Le marxisme, l'Etat et la question urbaine*, Paris: Presses universitaires de France. (=1982, 「資本主義的都市化に関するマルクス主義理論の寄与」 鯉坂学・吉原直樹・山田操訳 『都市社会学』 恒星社厚生閣, 189-228.)

- 町村敬志, 1986, 「『原型』としての都市社会学——R・E・パークが残したもの——」町村敬志・好井裕明編訳 『実験室としての都市——パーク社会学論文選』 御茶の水書房, 155-80.)
- 町村敬志, 2002, 「「国土」に充たされていく開発——戦後復興期の開発ナショナリズム——」『ポリテイク』5: 144-169.
- 町村敬志, 2007, 「空間と場所」長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志編『社会学』有斐閣, 201-239.
- 町村敬志, 2011, 『開発主義の構造と心性——戦後日本がダムでみた夢と現実』御茶の水書房.
- MacLeod, G. 2011, “Urban Politics Reconsidered--Growth Machine to Post-democratic City?—”, *Urban Studies*, 48:2629-2660.
- 真木悠介, 1971, 『人間解放の理論の為に』筑摩書房.
- 松原治郎・似田貝香門, 1976, 『住民運動の論理: 運動の展開過程・課題と展望』学陽書房.
- 松原隆一郎, 2002, 『失われた景観——戦後日本が築いたもの』, PHP 研究所.
- 松田素二, 1999, 『抵抗する都市: ナイロビ移民の世界から』岩波書店.
- 松本康, 2003, 「都市社会学の遷移と伝統」『日本都市社会学年報』21: 63-79.
- 松下圭一, 1971, 『シビルミニマムの思想』東京大学出版会.
- 松浦寛, 2006, 「環境訴訟における行政事件訴訟法九条二項の意義」『帝塚山法学』, 11: 215-243.
- Mayer, H.M and R.C. Wade, 1969, *Chiago: Growth of a Metropolis*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Mayer, M. 2009, "City: analysis of urban trends, culture, theory, policy, action", *City*, 13(2-3): 362-374.
- McKenzie, R.D. 1923, *The Neighborhood: A Study of Local Life in the City of Columbus*, Ohio: The University of Chicago Press.
- McKenzie, R.D. 1929, "Book Review of the Gold Coast and the Slum by Harvey W. Zoubaugh, and The Ghetto by Louis Wirth", *American Journal of Sociology*, 35(3): 486-487.
- Mead, G.H. 1934, *Mind, Self, and Society*, Chicago: University of Chicago Press. (=1995, 河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社.)
- Melucci, A. 1989. *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, London: Hutchinson Radius. (=1997, 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民(ノマド)——新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店.)
- Merrifield, A. 1995, "Lefebvre, Anti-logos and Nietzsche: An Alternative reading of the production of space", *Antipode*, 27(3): 294-303.

- 道場親信, 2006, 「1960-70 年代「市民運動」「住民運動」の歴史的位置：中断された「公共性」論議と運動史的文脈をつなぎ直すために」『社会学評論』57(2): 240-258.
- 三重野卓, 2000, 『「生活の質」と共生』白桃書房.
- 見上崇洋, 2006, 『地域空間をめぐる住民の利益と法』有斐閣.
- 養原敬, 2007, 「真価が問われる自治体のまちづくり」『まちづくり』14: 12-15.
- 見田宗介, 1997, 「差異の銀河へ——共生の想像力」栗原彬編『共生の方へ（講座 差別の社会学）』弘文堂, 28-31.
- 三浦展, 2004, 『ファスト風土化する日本——郊外化とその病理』, 洋泉社.
- 三浦展, 2006, 『脱ファスト風土宣言——商店街を救え!』, 洋泉社.
- 三浦倫平, 2009a, 「運動レパトリーとしての行政訴訟の意味——下北沢再開発問題を事例として」『ソシオロギス』33: 79-100.
- 三浦倫平, 2009b, 「迷宮の盛り場・下北沢——その誕生と終焉——」『Sociology today』19: 16-40.
- 宮崎省吾, 1975, 『いま、公共性を撃つ——「ドキュメント」横浜新貨物線反対運動』新泉社. (2011, 『いま、公共性を撃つ——「ドキュメント」横浜新貨物線反対運動』創土社.)
- Mooney, G., and M. Danson, 1997, "Beyond Cultural City: Glasgow as a Dual City," N. Jewson and S. MacGergor eds, *Transforming Cities: Contested Governance and New Spatial Divisions*, London: Routledge, 73-86.
- Mouffe, C. 2005, *On the Political*, New York: Routledge. (=2008, 酒井隆史監訳『政治的なものについて——闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』明石書店.)
- 中井検裕・村木美貴・高山幸太郎, 2002, 「商業集積地における空間の『奥行』に関する研究——下北沢を対象として——」『都市計画. 別冊, 都市計画論文集』37: 79-84.
- 中野正大, 1997, 「社会調査からみた初期シカゴ学派」『シカゴ社会学の研究-初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣, 3-37.
- 中野卓, 1975a, 「社会学的調査と『共同行為』——水島工業地帯に包み込まれた村々で」『UP』33: 1-6.
- 中野卓, 1975b, 「社会学的調査における被調査者との所謂『共同行為』について——環境問題と歴史社会学的調査（その二）」『未来』102: 28-33.
- 中野卓, 1975c, 「社会学的な調査の方法と調査者・被調査者の関係——環境問題と歴史社会学的調査（その三）」『未来』103: 28-33.
- Newman, K. and E.K. Wyly, 2006, "The right to stay put, revisited: gentrification and resistance to displacement in New York City," *Urban Studies*, 43(1): 23-57.
- 二瓶正史, 2006, 「道の履歴がつくる「下北沢らしさ」」『建築とまちづくり』341: 44-46.
- 西周, 1875, 「人生三宝説」『名六』(=1960, 大久保利謙編『西周全集 第1巻』宗高書房.)
- 西城戸誠, 2008, 『抗いの条件——社会運動の文化的アプローチ』人文書院.
- 西村ユミ, 2001, 『語りかける身体』ゆみる出版.

- 似田貝香門, 1973, 「マルクスの"positive"概念をめぐる--人間存在の「肯定性」の検証」『現代の理論』10(12):59-77.
- 似田貝香門, 1974, 「社会調査の曲がり角——住民運動調査後の覚え書き」『UP』24: 1-7.
- 似田貝香門, 1977, 「運動者の総括と研究者の主体性 (下)」『UP』56: 22-26.
- 似田貝香門, 1986, 「概説 日本の社会学 社会運動」似田貝香門・梶田孝道・福岡安則編『リーディングス日本の社会学 10 社会運動』東京大学出版会, 3-13.
- 似田貝香門, 1996, 「再び『共同行為』へ——阪神大震災の調査から——」『環境社会学研究』2: 50-61.
- 似田貝香門, 2001, 「市民の複数性——今日の生をめぐる〈主体性〉と〈公共性〉」『地域社会学会年報』13: 38-56.
- 似田貝香門, 2006, 「越境と共存的世界——新たな社会の尖端的現象の把握について」似田貝香門・矢澤澄子・吉原直樹編『越境する都市とガバナンス』法政大学出版局, 1-31.
- 似田貝香門, 2008, 「まちづくりと住民運動」似田貝香門・大野秀敏・小泉秀樹・林泰義・森反章夫編『まちづくりの百科事典』丸善, xiii-xxiv.
- 似田貝香門, 2013, 「「つぶやき」分析のまとめと今後の課題」震災がつなぐ全国ネットワーク編『寄り添いながらつながりを』, 30-37.
- 似田貝香門, 2014, 「災害からの復旧・復興の「経済」複合体——新たなモラル・エコノミーを求めて——」『地域社会学会年報』26: 135-152.
- 小田亮, 2003, 「日常的抵抗論」, <http://p.booklog.jp/book/40379/read?p=2>, (2015/01/17 access).
- 小田亮, 2012, 「日常的抵抗」論の可能性——異種混雑性／脱領土化／クレオール性再考——, <http://d.hatena.ne.jp/araiken/20120914/1347624919>, (2015/01/17 access).
- 小田急沿線街づくり研究会, 1987, 『小田急沿線街づくり研究会報告書』
- 小田急高架訴訟弁護団編, 2006, 『住民には法を創る権利がある : 小田急高架訴訟大法廷の記録』日本評論社.
- 大川隆司, 2005, 「小田急訴訟大法廷口頭弁論の争点——原告適格について判例変更を期待」『法学セミナー』50(11): 58-61.
- 太田好信, 2001, 『民族誌的近代への介入 : 文化を語る権利は誰にあるのか』, 人文書院.
- 奥田道大, 1975, 「都市住民運動の展開とコミュニティ理念」国民生活センター編『現代日本のコミュニティ』川島書店.
- 尾関周二, 2007, 『環境思想と人間学の革新』青木書店.
- 尾関周二, 2009, 「差別・抑圧のない共同性へ向けて——共生型共同社会の構築と連関して」藤谷秀・大屋定晴・尾関周二 編『共生と共同、連帯の未来——21 世紀に託された思想』青木書店, 2-35.
- Park, R.E., 1925=2011, "The City : Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment" (=2011, 松本康訳「都市の成長——研究プロジェクト序説」『近

- 代アーバニズム』日本評論社, 21-87.)
- Park, R.E. 1929, "The city as a social laboratory", *Chicago: An Experiment in Social Science Research*, (=1986, 町村敬志・好井裕明編訳 『実験室としての都市——パーク社会学論文選』 御茶の水書房, 11-36.)
- Park, R.E., 1936, "Human Ecology," *American Journal of Sociology* 42(1): 1-15. (=1986, 町村敬志・好井裕明編訳 『実験室としての都市——パーク社会学論文選』 御茶の水書房, 155-80.)
- Perry, B. and A. Harding, 2002, "The Future of Urban Sociology : Report of Joint Sessions of the British and American Sociological Associations" , *International Journal of Urban and Regional Research*, 26(4): 844-53.
- Pickvance, C.G. 1977, "Marxist approaches to the study of urban politics: Divergences among some recent French studies", *International Journal of Urban and Regional Research*, 1(1-4): 219-255.(=1982, 山田操・吉原直樹・鯉坂学訳「都市社会学への史的唯物論的アプローチ」『都市社会学——新しい理論的展望——』 恒星社厚生閣, 2-51.)
- Poulantzas, N. 1978, *L'État, le pouvoir, le socialisme*, Paris: PUF. (=1984, 田中正人・柳内隆訳『国家・権力・社会主義』ユニテ.)
- Purcell, M. 2013, "The right to the city : the struggle for democracy in the urban public realm", *Policy&Politics*, 43(3): 311-27.
- Rancière, J. 1995, *La mésentente : politique et philosophie*, Paris: Galilée. (=2005, 松葉祥一ほか訳『不和あるいは了解なき了解——政治の哲学は可能か』インスクリプト.)
- Rancière, J. 2005, *La haine de la démocratie*, Paris: La Fabrique. (=2008, 松葉祥一訳『民主主義への憎悪』インスクリプト.)
- Redfern PA. 1997, "A new look at gentrification: 1. Gentrification and domestic technologies ", *Environment and Planning A*, 29(7) : 1275-1296.
- Relph, E. 1976, *Place and placelessness*, London: Pion. (=1991, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学——没場所性を越えて——』筑摩書房.)
- 最高裁判所事務総局行政局, 2002, 『行政事件に係る統計資料』(2014年10月20日取得 : <http://www.kantei.go.jp/jp/sihouseido/kentoukai/gyouseisoshyou/dai3/5siryo.pdf>)
- 斉藤驍, 2005, 「小田急事件の最高裁大法廷口頭弁論開廷の意義」『法律時報』77(12): 1-3.
- 斉藤驍, 2006, 「小田急大法廷判決の意義——応答的法と環境法の創出」『法律時報』78(3): 75-81.
- 斎藤日出治, 2000, 「解説 : ≪空間の生産≫の問題圏」斎藤日出治訳『空間の生産』, 青木書店, 603-645.
- 斎藤純一, 2008, 『政治と複数性——民主的な公共性にむけて』岩波書店.
- 齊藤康則, 2009, 「地方都市における乗合タクシー事業をめぐる住民と行政の協働」地域社会学会編『縮小社会における地域再生』, 75-86.

- 作田啓一, 1971, 「共同態と主体性」 吉田光・作田啓一・生松敬三編『近代日本社会思想史 II』有斐閣, 379-407.
- Sassen, S. 1988, *The Mobility of Labor and Capital: A Study in International Investment and Labor Flow*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1992, 森田桐郎ほか訳『労働と資本の国際移動——世界都市と移民労働者』岩波書店.)
- Sassen, S. 1991, *The Global City*, Princeton: Princeton University Press.
- 佐藤健二, 1993a, 「コミュニティ調査のなかの『コミュニティ』」 蓮見音彦・奥田道大編『21世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会, 153-176. (2011, 「コミュニティ調査の方法的課題」 佐藤健二『社会調査史のリテラシー——方法を読む社会学的想像力』新曜社, 117-140.)
- 佐藤健二, 1993b, 「モノグラフィの都市認識」『日本都市社会学会年報』11: 5-8. (2011, 「コミュニティ調査の方法的課題」 佐藤健二『社会調査史のリテラシー——方法を読む社会学的想像力』新曜社, 79-84.)
- 佐藤健二, 2000, 「社会学の言説-社会調査史からの問題提起」 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知 3 言説: 切り裂く』東京大学出版会, 135-59. (2011, 「調査のなかの権力を考える」 佐藤健二『社会調査史のリテラシー——方法を読む社会学的想像力』新曜社, 244-269.)
- 佐藤健二, 2004, 「近代日本の風景意識」 松原隆一郎・荒山正彦・佐藤健二・若林幹夫・安彦一恵編『<景観>を再考する』青弓社, 121-158.
- 佐藤健二, 2006, 「地域社会に対するリテラシー」 似田貝香門監修・町村敬志編『地域社会学の視座と方法』東信堂, 213-242. (2011, 「地域社会に対するリテラシー」 佐藤健二『社会調査史のリテラシー——方法を読む社会学的想像力』新曜社, 492-522.)
- 佐藤健二, 2012, 「公共性の歴史的転換」 盛山和夫・上野千鶴子・武川 正吾編『公共社会学 1 リスク・市民社会・公共性』東京大学出版会, 31-50.
- 佐藤俊一, 1988, 『現代都市政治理論——西欧から日本へのオデュッセア』三嶺書房.
- Saunders, P. 1979, *Urban politics : a sociological approach*, London: Hutchinson.
- Saunders, P. 1981, *Social Theory and the Urban Question*. London: Hutchison.
- Schütz, A. 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die Verstehende Soziologie*, Springer Verlag. (= 1982 , 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社.)
- Scott, J. 1985, *Weapons of the weak : everyday forms of peasant resistance*. Yale University Press.
- 盛山和夫, 2011, 『社会学とは何か——意味世界への探求』ミネルヴァ書房.
- 盛山和夫, 2012, 「公共社会学とは何か」 盛山和夫・上野千鶴子・武川 正吾編『公共社会学 1 リスク・市民社会・公共性』東京大学出版会, 11-30.
- 盛山和夫, 2013, 『社会学の方法的立場——客観性とはなにか』東京大学出版会.

- Selznik, P and P. Nonet, 1978, *Law and society in transition : toward responsive law*, New York: Octagon Books. (=1981, 六本佳平訳『法と社会の変動理論』岩波書店.)
- 世田谷区, 1971, 『世田谷区総合計画—基本計画 緑と太陽の文化都市をめざして』
- 世田谷区, 1976, 『世田谷近・現代史』.
- 世田谷区議会, 1971, 『世田谷区議会史』世田谷区議会.
- せたがや百年史編纂委員会, 1992, 『せたがや百年史 上巻』.
- 志田歩, 2005, 「下北沢を巡るネヴァーエンディング・ストーリー」『現代思想』33(5): 94-103.
- 椎名彪, 1983, 「連続立体交差事業の事業効果と意義」『建設月報』36(7): 70-73.
- 塩原勉, 1976, 『組織と運動の理論』新曜社.
- 塩野宏, 2003, 「行政訴訟改革の動向——行政訴訟検討会の『考え方』を中心に」『法曹時報』56(3): 1-29.
- 島恭彦, 1975, 「現代自治体論の潮流と課題」『現代と思想』, 19: 2-20.
- 清水亮, 2008, 「『縮小社会』と地域社会の現在」『地域社会学会年報』20: 3-8.
- 清水洋行, 2001, 「地域社会における新たな主体像をめぐるアプローチの可能性と課題」, 地域社会学会編『市民と地域——自己決定・協働, その主体——』ハーベスト社.
- 椎名彪, 1983, 「連続立体交差事業の事業効果と意義」『建設月報』36(7): 70-73.
- 庄司興吉, 1980, 「住民運動の社会学」青井和夫・庄司興吉編『家族と地域の社会学』東京大学出版会, 231-251.
- Smith, N. 1996, *The New Urban Frontier : Gentrification and the Revanchist City*, New York: Routledge.
- Snow, D.A. and RD. Benford 1988, “Ideology, Frame Resonance, and Participant Mobilization”, B. Klandermans, H. Kriesi, and S. Tarrow eds, *From Structure to Action: Social Movement Participation Across Cultures*. Greenwich: JAI Press, 197-217
- Soja, E. 1989, *Postmodern Geographies: the Reassertion of Space in Critical Social Theory*, New York: Verso. (=2003, 加藤政洋・西部均・水内俊雄・長尾謙吉・大城直樹訳『ポストモダン地理学——批判的社会理論における空間の位相』青土社.)
- Soja, E. 1996, *Thirdspace: Journeys to Los Angeles and Other Real-and-Imagined Places*, Cambridge: Blackwell. (=加藤政洋訳『第三空間——ポストモダンの空間論的転回』青土社.)
- Soja, E. 2000, *Postmetropolis: Critical Studies of Cities and Regions*, Oxford: Blackwell.
- Soja, Edward, 2010, *Seeking Spatial Justice*, MN : University of Minnesota Press.
- Spencer, J. 1989, “Anthropology as a kind of writing”, *Man*, 24(1): 145-164.
- Stoecker, R. 1994, *Defending Community : The Struggle for Alternative Development in Cedar-Riverside*, Philadelphia : Temple University Press.

- Stone, C.N. 1989, *Regime Politics: Governing Atlanta, 1946-88*, Lawrence: University Press of Kansas.
- Storper, M. 1997. *The Regional World: Territorial Development in a Global Economy*. New York: The Guilford Press.
- 杉島敬志, 2001, 「人類学的设计主義」杉島敬志編『人類学的実践の再構築: ポストコロニアル転回以後』世界思想社, 226-245.
- 鈴木広, 1984, 「都市社会学の問題意識」鈴木広・倉沢進編『都市社会学』アカデミア出版会.
- 高橋徹, 1985, 「後期資本主義社会における新しい社会運動」『思想』737: 2-14.
- 武川正吾, 2003, 「グローカリティと公共性の転換」『地域社会学会年報』, 15: 1-19.
- 玉井眞理子, 2001 「シカゴ学派の盛衰——社会情勢的背景との関連からみた初期シカゴ学派の成立から衰退まで——」『大阪大学教育年報』6: 53-62.
- 田中耕一, 2006, 「構築主義論争の帰結——記述主義の呪縛を解くために」『構築主義の社会学——実在論争を超えて』平英美・中河伸俊編, 世界思想社, 214-238.
- 田中重好, 2007, 「縮小社会を、どう論ずるか」『地域社会学会会報』144: 5-10.
- 田中重好, 2010, 『地域から生まれる公共性——公共性と共同性の交点——』、ミネルヴァ書房.
- 竹村牧男・松尾友矩, 2006, 『共生のかたち』誠信書房.
- Therborn, G. 2011, “End of paradigm : the current crisis and the idea of stateless cities”, *Environment and Planning A*, 43: 272-285.
- Tissot, S. 2011, “Of Dogs and Men: The Making of Spatial Boundaries in a Gentrifying Neighborhood,” *City & Community*, 10(3) : 265-284.
- 東京都建設局, 2007, 「小田急小田原線（代々木上原駅～梅ヶ丘駅間）の地下連続立体交差及び複々線化事業の概要について」『建設関連業月報』307:16-20.
- 東京都建設局, 2009, 「東京都の連続立体交差事業」『道路』820: 26-29.
- 富井利安, 2004, 「環境権と景観享受権」富井利安編『環境・公害法の理論と実践』日本評論社.
- 富永健一, 1995, 『社会学講座: 人と社会の学』中央公書.
- Touraine, A. 1978, *La voix et le regard*, Paris : Librairie générale française. (=1983, 梶田孝道訳『声とまなざし』新泉社.)
- Touraine, A. and H. Hegedus and F. Dubet and M. Wieviorka, 1981, *Le pays contre l'Etat : Lutttes Occitanes*, Paris: Edition du Seuil. (=1984, 宮島喬訳『現代国家と地域闘争—フランスとオクシタニー』新泉社.)
- Turner, R.H and L.M. Killian, 1957, *Collective Behavior*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Turner, R.H and L.M. Killian, 1972, *Collective Behavior*(2nd edition), Englewood Cliffs:

- Prentice-Hall.
- 上野俊樹, 1991, 『アルチュセールとプーランツァス』 新日本出版社.
- 宇井純, 1974, 「公害と裁判」, 宇井純『公害原論 3』 214-259.
- 浦野正樹, 2009, 「「縮小社会」における地域再生のゆくえ」『地域社会学会年報』 21: 3-13.
- 牛山美穂, 2006, 「「抵抗」および「戦術」概念についての考察」『死生学研究』 8: 194-210.
- 若林幹夫, 1996, 「社会学的対象としての都市」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『都市と都市化の社会学』 岩波書店, 1-28.
- Walton, J. 1992, *Western Times and Water wars : State, Culture, and Rebellion in Calif.* Berkeley : Univ. California Press.
- 亘理格, 2003, 「公私機能分担の変容と行政法理論」『公法学研究』 65: 188-199.
- Weber, M. 1922, *Wirtschaft und Gesellschaft : Grundriss der verstehenden Soziologie*, Tübingen. (=1970, 世良晃志郎訳『支配の諸類型』 創文社.)
- Willis, P. 1977, *Learning to labour : How working class kids get working class jobs.* Ashgate. (=熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども : 学校への犯行 労働への順応』 筑摩書房).
- Wirth, L. 1928, *The Ghetto*, Chicago: Chicago University of Press. (=1971, 今野敏彦訳『ユダヤ人と疎外社会—ゲットーの原型と系譜』 新泉社.)
- Wirth, L. 1938, "Urbanism as a way of life", *American Journal of Sociology*, 44: 1-24. (=2011, 松本康訳「生活様式としてのアーバニズム」『近代アーバニズム』 日本評論社 : 89-115.)
- World Social Forum, 2004, *World Charter for the Right to the city*, (2014 年 10 月 20 日取得 : <http://www.hic-net.org/document.php?pid=2422>).
- Wyly, EK and DJ Hammel, 1999, "Islands of decay in seas of renewal: Housing policy and the resurgence of gentrification", *Housing Policy Debate*, 10(4) : 711-771.
- 八木田功, 1969, 「鉄道高架事業—所謂連続立体交差事業—について」『新都市』 都市計画協会編, 23(12): 2-8.
- 柳田国男, 1935, 『郷土生活の研究法』 刀江出版. (=1998, 『柳田国男全集』 8, 筑摩書房, 195-368.)
- 吉田克己, 2003, 「「景観利益」の法的保護」『判例タイムズ』 1120: 67-73.
- 吉原直樹, 1985, 「もうひとつの都市社会学」『地域社会学会会報』 3: 263-292.
- 吉原直樹, 1997, 「訳者あとがき」『ゴールドコーストとスラム』 ハーベスト社, 313-318.
- 吉岡政徳, 2000, 「歴史と関わる人類学」『国立民族学博物館研究報告別冊』 21 : 3-34.
- Young, J. 2007, *The Vertigo of Late Modernity*, London : Sage.(=2008, 木下ちがや・中村好孝・丸山真央訳『後期近代の目眩——排除から過剰包摂へ——』 青土社.)
- Zorbaugh, H.W. 1929, *The Gold Coast and the slum*, Chicago: University of Chicago Press. (=1997, 吉原直樹訳『ゴールド・コーストとスラム』 ハーベスト社.)

論文の内容の要旨

論文題目 「共生」の都市社会学——理論的実践の構築に焦点をあてて——

氏名 三浦倫平

本稿は現代の都市社会においてテーマ化する「共生」という問題を多次的に論究する事を通じて、都市社会学という実践を総体的に問い直す事を目的とする。現代の都市問題の多くは「共生」の問題として捉えるべきであるにも関わらず、都市社会学は十分に捉える事が出来ていない。何故「共生」というテーマが浮上するのか、それに対して運動はどのような構想を持ち、どのような課題に直面しているのか。その事を明らかにする為には、広範囲にわたる既存の認識を再考し、分断されている、あるいは隠されている課題を剔出し、その課題を乗り越える新たな枠組みを探る必要がある。

そこで序章では、既存の「共生」に関する認識では、近年問題になっている「都市への権利」を主張する都市社会運動を「共生」の問題として捉える事が出来ない事を明らかにした。その上で、「共生」という概念を「異質な要素同士の共存から、相互理解などを経て、共に生きていくことを可能にする社会を新たに形成していく動き」として社会学的に再定義し、「都市への権利」を主張する都市社会運動を「共生」の問題として捉える事を試みた。

1章と2章では、既存の理論の認識＝方法について検討を行った。1章ではまず第1節で、

「共生」というテーマを内包する「都市空間の危機的状況」に関する研究群を検討し、その課題を検討した。その成果と課題から、Ⅰ：いかなる要因で「共生」が揺らいできているのか、Ⅱ：いかなる「共生」の構想がいかんして生み出されているのか、Ⅲ：いかにして「共生」を可能にする社会を作り出していく事ができるのか、その実践にはどのような可能性や課題が存在しているのか、といった「共生」をめぐる 3 つの問題設定を導出し、人々の意味世界を焦点とする事の重要性を論じた。

次に第 2 節では、都市空間の危機的状況を「共生」の問題として論究できていない既存の都市社会学の認識＝方法の背景に理論的実践の偏りがある事を論じた。「都市」をどのように理論化するのかという事が昨今議論される中、理論的実践の重要性を指摘していた新都市社会学の議論の意義と課題を再検討する必要がある。その結果、Althusser の理論的実践が誤解されたまま現在まできている事を明らかにした。

そして、第 3 節では、理論的実践の重要性を主張していた M. Castells の方法＝認識を振り返りながら、彼が近年重要なテーマとして掲げる「共生」の方法＝認識を問い、その課題を指摘した。理論的実践を放棄してしまった点、空間を理論的対象として設定していない為に、空間をめぐる意味、関係性、実践など様々な要素が意味世界と相互に重層的に関連するという方法＝認識を持っていない点に課題がある事を明らかにした。

そして 2 章では、共生を捉える上で重要な焦点となる事が明らかとなった意味世界をこれまでの都市社会学がどのように捉えてきたのか、その方法と認識を検討した。

第 1 節では、初期シカゴ学派が早々に意味世界を捉える事の重要性を理論的に論じていた点を明らかにすると共に、人間生態学的な空間認識が意味世界の歴史性、多様性、構成要素といったものを捉える事を阻んでいた点を明らかにした。

第 2 節では、意味世界を焦点にして「共生」に関する問題設定を先駆的に論究してきた日本の開発研究や住民運動論の成果と課題から、意味世界を捉える際の重要な論点を導出した。それは、①主体の布置連関を射程に収めながら、論理化されていない意味世界の展開を把握していくこと、②意味世界の共同性の多様性や根拠を把握すること、③意味世界の背景要因や構成要素を明らかにすること、④その後どのような方法で社会を形成していくのかという構想＝意味世界を把握することの 4 点である。

第 3 節では、「社会」と「空間」が重層的に絡み合う理論的対象として意味世界を位置付けた。意味世界それ自体が多様な要素を包含する点で理論的に空間的な対象であり、構成要素としてどのような経験的な空間の諸要素や社会の諸要素が含みこまれているのか、それはどのように配置されているのか、どのように存立しているのかという点を描き出す必要がある事を論じた。そして、意味世界の歴史性、多様性、構成要素を捉えていく為の方法＝認識の手掛かりとして、Lefebvre の理論を再検討した。

次に、3 章では、「都市への権利」がテーマ化している下北沢地域の紛争を素材として、序章と 1 章 1 節で導出した社会学的な問題設定がイシューとして浮上している事を確認し

つつ、分析を行った。

まず第 1 節では、下北沢地域の概要と紛争の原因となった連続立体交差事業の概要について明らかにした。

第 2 節では、計画推進側と反対側の論理や意味世界に着目しながら、いかなる「共生」の構想が存在するのかを明らかにした。計画推進側は人間工学的な都市空間によって「誰もが安全で安心に生活、利用できる都市空間」を構想していたが、都市計画は物理的環境の変化を引き起こし、結果的に近隣住民、商業者、そして来街者の利害を損失させる側面があった。また、推進側が想定する「社会」の中には商業者や住民、来街者など広く含まれるが、「社会」を形成する主体としては多くの商業者や住民、来街者が外されており、「社会」を形成する主体に関しても、個々の主体を、経済合理性を迫及する主体として前提にしていた為に、私的所有権を制限する方向性にはなかなか展開していかなかった。

一方、反対運動側の意味世界の「社会」には街の当事者として来街者も含まれ、当事者間の水平的な関係性が構想されていた。また、計画を推進する立場に立つ人々も、共に「社会」を形成する主体として運動側に構想されていた為、交通利便性や安全性等の推進側の主張が尊重され、共存可能な代替案が作成されていた。更に、街のあらゆる関係者が享受できるものとして文化的権益という共通利益も構想されていた。そして、その後の実践で多様な価値が共存できるような都市空間を生み出そうとしていた点においても、より共生が可能な社会を構想していた。

次に、第 3 節では、以上の共生の構想の対立の背景に、人々の意味世界が規範的、集合的、歴史的に作り上げられてきた事が影響しているという事を明らかにした。

運動側の共生の構想の核となる「歩いて楽しめる街」という意味世界の背景には、土地の利用形態が多様に変化する事、それと相互作用する形で街の表象が様々に変化し、またそれに対応する形で、来街者の実践が生まれ、そこから社会関係が生み出され、それがまた土地の利用形態や表象に大きく影響を生み出していくというような循環構造がある事が明らかとなった。この循環構造に人々は規定されて意味世界を作り上げると共に、同時に多様に存在する物質、表象、社会関係、実践を構成要素として取捨選択し意味世界を作り上げていった。

計画推進側の中でも地権者や商業者は、ビルオーナーになるという形で経済的合理性を追求する事で利益を享受するようになった経緯があり、その意味世界の構成要素に街の高層化を受け入れる傾向がある。都市計画事業という表象に対しても当初は否定的だったが、行政を上位の政治的主体に設定する政治的な構想が支配的であった為、行政との数十年にわたる協議の結果、表象は正当化/正統化され受け入れられていった。このように推進側も物質、表象、社会関係、実践の循環構造に規定されるが、運動側とは異なる構成要素を選択する事で異なる意味世界を歴史的に作り上げていった。

以上のように、多様な意味世界を生み出しやすい盛り場という都市空間の磁場の中で、私的所有権を最大限認める国家主導の都市型公共事業がまちづくりの形骸化を進め、地権

者らの意味世界を包摂し、人間工学的な都市空間を作り上げようとする事が、この地域における共生の揺らぎの大きな要因である事が明らかとなった。都市空間をめぐり多様な意味世界が生み出される中で、特定の意味世界によって都市空間を排他的に独占しようとする社会経済的な動きが共生を難しくしていると言える。

第4節では運動の展開に即しながら、いかに共生を可能にする社会を作り上げるか、その方法をめぐる3つの政治的構想に着目し、その意義と課題について分析を行った。

三つの構想のうち一つは、一連の都市計画を推進する制度内の諸エージェントを「敵」として境界線を引き、「敵」の計画を止める事が共生社会を実現する為には最重要という「対抗型の構想」である。二つ目は「敵/味方」というような境界線を引くのではなく、運動主体と制度内の諸エージェントも協働で討議をしていく事が、より良い共生社会に向けた第一歩となるという「連帯型の構想」である。三つ目は、様々なイベントによって、問題に関して無自覚な多くの人を巻き込んでいく事を優先とする「イベント型の構想」である。

対抗型の構想の課題であったまちづくりの機運というものを残り二つの構想が生み出し、連帯型とイベント型の構想の課題であった行政に対するブレーキを対抗型の構想は生み出していた。そして、対抗型と連帯型の構想の課題であった幅広い人々への訴求力をイベント型の構想はカバーしていた。このように、複数の構想が存在する事で、結果的に、各々のタイプの課題をカバーしており、今後これらの構想が共存出来るかどうかは共生の社会の実現という終わりなき戦いに向けて重要であるという事を論じた。

最後に結論で、本研究がいかに理論的实践を構築したのかを、都市社会学と公共社会学の接続という試みから説明した。そして、意味世界を「社会」と「空間」が重層的に絡み合う理論的対象として捉える事の意義、理論と事例の対話を通して明らかになった重要な論点（「よそ者」論・「都市への権利」論・「公共圏」論への新たな視点）、本研究の方法的な意義を示すと共に、最後に本研究の課題と展望を明らかにした。

